

| | | | |
|-------|---|--|-------------------------------|
| 団体名 | 子どもの美術教育をサポートする会(滋賀県大津市) | | |
| 団体の概要 | 活動開始年 | 西暦 2000年 1月 活動開始 | |
| | メンバー | 人数 | < 役員数 > 3名 < ボランティア数 > 16名 |
| | | 構成 | 子どもの美術教育に関心のある大人達と大学生 |
| | 予算規模 | 平成13年度概算 ・収入 ¥100,000 ・支出 ¥100,000 | |
| 団体の目的 | 地域の重要な教育資源である美術館・博物館と学校と地域ボランティアが連携することで、子どもたちに本物に触れる機会を与え、豊かな感性を育てるために、今までにない楽しい体験学習を実現する。 | | |

ボランティア活動の概要

滋賀県内3つの美術館（県立近代美術館、県立陶芸の森、MIHO MUSEUM）と専門家（陶芸、茶道、古典楽器演奏者）の協力を得て、小学校との連携授業をコーディネートをしている。1年生から6年生迄の体験プログラムを実施しており、平成14年度では実施校9校、約1600名の生徒が参加した。

ボランティアは、学校現場と美術館側とそれぞれの事情を理解しながら、両者間の連絡調整役を担い、子ども達に本物にふれる楽しい授業を体験してもらう提案と企画づくりをしている。体験授業中には、美術館学芸員の補助者として、子ども達の制作活動を手伝っている。また、学校と美術館の意向や状況によっては、ボランティアメンバー自らがゲストティーチャーとして体験授業を実施することもある。

ボランティアは特に積極的に募集活動をしていないが、美術館や地域で子ども対象のボランティア経験者中心に口コミで集まった。関心のある人には情報を提供し、自由に見学、参加も自由としている。それによって子どもへの熱い思いのある意識の高い人々が自然と集まり、本物に触れる出会いの輪を楽しく広げている。

ボランティア活動を立ち上げた経緯

会の代表者が世田谷美術館で行っていた教育ボランティア経験を生かし、滋賀県内の美術館・博物館にてボランティア活動を始めた。そのなかで、すべての子どもたちに平等に、本物に触れる体験を与えるためには、学校との連携が必須と考えた。また、開かれた学校という教育の転換期にあたり、学校と地域の教育施設との連携が進むことで、学校側にとっても、よりよい教材や上質な授業内容へと発展する良い機会になるのではないかと考えた。

そこで、草津市地域協働合校の取り組みに参加したところ、美術を専門とした小学校校

長を紹介された。その出会いがきっかけとなり、県内4つのミュージアム関係者が連携授業づくりに参加協力することになった。

ボランティア活動を行う上での困難点や課題

前例のないことをするため、最初は個人的協力から始まり、個々の負担も大きかった。また美術館も学校もそれぞれの組織の成り立ちや個人の状況が違うので、細かい問題が多くあり、何度も押しつぶされそうになった。すべては実績と評価によると思い、雑誌・新聞・TVなどさまざまな媒体で活動を取り上げてもらったことで、評価され実績が積みあがり、ようやく個人ベースではなく美術館全体として協力が得られるようになった。

学校側との関係づくりも、ある校長先生が活動に理解を示してくれたことで、2001年に滋賀県で実施された美術・図工全国大会の公開授業で、美術館との連携授業の取り組みが全国に発信された。実施校が全国教育美術展全国学校賞にて最優秀賞を受賞するなど反響をよび、毎年学校側からの連携授業の依頼相談が増えている。

学校と連携を行う際の工夫

<工夫：オーダーメイドの計画づくり>

学校全体で取り組めるケースもあれば、一部の教員によるものであり学校内で統一的な理解は得られていないケースもあるなど、学校によって温度差や状況が異なるので、どのように進めるか常に神経を使っている。特に、学校にとって資金面は大きな問題なので配慮している。一方的に画一的な企画を押し付けるのではなく、各美術館・各学校の個性・方向性をよくつかんで話を進めるよう心がけている。

<工夫：安心感をもたらすきめ細かな打ち合わせ>

美術教育をサポートする会と美術館関係者・学校関係者と、それぞれ細かい打ち合わせにより、「提供できること」と、「求めていること」を掴むようにしている。そのためには、相談や依頼のあった学校関係者と、美術館関係者の出会いの場づくりをし、プログラムの内容について、どこを変えたら良いかなど、確認と検討を重ねている。日程調整、準備物、費用面などを明確にすることが重要であり、互いが遠慮しがちな部分を会のボランティアが仲立ちすることで、両者がしっかり話し合えるように促している。

また、授業実施の直前にも最終的な打ち合わせをし、授業のタイムテーブル、準備物の確認など細かい調整をして、授業が滞りなく進められるような配慮をしている。

<工夫：外部評価者の受け入れ>

連携授業の情報を教育・行政関係者やマスコミに伝え、学校の許可の範囲内で見学者を受け入れるようにしている。授業の生徒の反応こそが成果・評価となるので、多くの人に現場に触れてもらうようにすることが大事だと考えている。

今後の課題と展望

校内研究、研修会で美術館関係者と学校関係者との交流の場を企画、さらに博物館の参加も増え、5館の協力による研修・交流を実施している。あわせて、美術館において教育関係者を対象とした研修の場を夏季研修として企画しており、学校関係者だけでなく地域のコーディネーターや大学生なども参加を予定している。また、公民館と学校と美術館とボランティアという4者の連携による企画も実施を予定している。そのほか、障害児学級や病院内の院内学校の子ども達への連携授業も進んでいる。

また、教材研究や授業内容のため両者が集まったの検討会を定期的実施し、学芸員が出張しての連携授業と、教材を用いて教師やボランティアで実施できる授業との両面を進めていく予定である。校外学習としての美術館訪問の特別授業の内容検討も進んでいる。

(団体代表者によるレポート、団体代表者へのヒアリング調査、団体資料より作成)

<連携授業の様子の写真>



<この事例のポイント>

学校側にとっても美術館側にとっても、ともにメリットのある“WIN-WINの関係”、「両者の喜び」を構築していることが、活動の継続につながっている。何段階もの過程を得て両者の意思の疎通をスムーズに進め、連携授業当日にベストな状況で生徒たちに実施できるように最大限に配慮するというきめ細かなコーディネートがなされていることで実現している。学校と美術館とボランティアという異なる文化をもつ主体が会って一つのことを成し遂げるには、相互に理解し尊重しながらそれぞれの意向や要望を調整していく必要があることを示している事例である。数多い授業研究や交流会がこの活動の基盤であり、先駆的活動は相互理解と協力から始まるといえよう。

また、情報発信に積極的に取り組んでおり、外部からの評価を得ていることで実績を作り出すという効果を産んでいる事例である。社会的に活動を評価するという支援もボランティア活動にとっては重要である。